

会 議 記 録

会議の名称		第1回守谷市学びの多様化学校設置検討委員会		
開催日時		令和8年5月29日（金） 開会：午前10時00分 閉会：11時55分		
開催場所		守谷市役所3階 庁議室		
事務局（担当課）		教育委員会 教育指導課		
出席者	委員	奈幡委員長、小林副委員長、直井委員、福島委員、染谷委員、鈴木委員、青山委員、秋田委員、片岡委員、石川委員、古橋委員、永野委員、高木委員		
	その他	学びの多様化学校マイスター 黒沢氏		
	市職員	教育指導課 課長補佐 望月、指導主事 G 寺田、吉田、田中		
公開・非公開の状況		☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開	傍聴者数	5人
公開不可の場合はその理由				
会議次第		1 開 会 2 あいさつ 3 協議事項 （1）委員長の選出について （2）学びの多様化学校について （3）守谷市学びの多様化学校の必要性について （4）その他 4 閉 会		

1 開 会

- ・出席委員：13 名 ※委員の過半数が出席しているため成立（要項第 6 条第 3 項）

2 あいさつ

- ・教育長挨拶
- ・委員自己紹介：13 名（任期：令和 8 年 5 月 29 日～令和 10 年 3 月 31 日）
- ・学びの多様化学校マイスター・黒沢氏紹介

3 協議事項

（1）委員長の選出について

- ・委員長：奈幡教育長 ※委員の推薦（要綱第 5 条）
- ・副委員長：小林教育部長 ※委員長の指名（要綱第 5 条）

（2）学びの多様化学校について

- ◆黒沢氏より、22 年間に及ぶ八王子市立高尾山学園（全国初の学びの多様化学校）での勤務経験に基づいた多様化学校運営のあり方について、説明があった。

【説明概要】

①「社会的自立」へのプロセス設計

不登校支援を単に学校に戻すことに限定せず、不登校からの回復から社会的自立（高校進学や就労）までのプロセスとして設計することが重要である。

単なる「居場所」の提供は義務教育ではない。「心の回復から社会的自立（高校進学や就職）へのプロセス」を設計することが重要である。

②複層的支援の構築

校内・校外の教育支援センターと学びの多様化学校が連携する「複層的な支援」が必要であり、多様化学校はその切り札である。

③不登校による経済的損失

不登校が長期化し、引きこもりや親の離職につながることで、日本全体で毎年 2 兆円から 4 兆円規模の経済的損失が生じているというデータ（速報値）もある。

④教職員の役割

教職員は「教える人」ではなく、生徒の活動を支える「伴走者」としての専門性が求められる。

⑤行政の役割

設置して終わりにせず、組織を超えてシステムを守る「推進力」を行政がもち続けるべきである。

⑥KPI（重要業績評価指標）の導入

学校運営に経営指標を取り入れる。例えば、「卒業生の進路決定率 90%以上」や「転

入前後の登校率の改善」を数値化し可視化することで、市議会や市民への説明責任を果たすとともに、教職員が目標を共有し、授業改善につなげる PDCA サイクルを回すことが可能になる。

(3) 守谷市学びの多様化学校の必要性について

◆事務局が提示した「午前は学び直し、午後は探究」という教育課程案に対し、黒沢氏から文部科学省との調整を見据えた具体的な助言があった。

【助言内容】

①教育課程編成に向けた理論構築の必要性

事務局案は、年間授業時数を標準の 1015 時間から 2 割減の 875 時間（週 20 コマ想定）としているが、削減した分の学習をどこで保障するのか、教科横断的な指導（なないろラーニング科など）の中で、どの教科のどの力をつけるのかを明確にする必要がある。放課後の補習時間の確保や、午後の選択メニューの中に基礎学習（数・英など）を組み込むことが求められる。

②登校時間の現実

事務局案では登校を 9 時半としているが、不登校の生徒の中には起立性調節障害を抱える子も多く、午前中の参加率は低くなる傾向がある。無理に朝から来させるのではなく、「午後からでも行きたくなる魅力的な授業」をいかに作るかが鍵である。

◆ 委員（代表校長）から、教員の役割を「教える人」から「伴走者」へ変えることの難しさについて意見があり、改善の手立てについて黒沢氏が回答した。

【助言内容】

①授業参加率の可視化

教科ごとの生徒の参加率を数値で出し、教師にフィードバックする手法が紹介された。これにより、教師自身に「なぜ自分の授業に生徒が来ない（出席しない）のか」という内省を促し、授業改善やマインドセットの変更を自発的に引き出すことが可能となる。

②実地研修の重要性

座学の研修は浸透しにくい。市内の他校の先生方が、学びの多様化学校で 1 日補助員として過ごす「実地研修」を取り入れてはどうか。これにより、多様化学校における支援・指導の好事例を市内の一般校へ「逆輸入」する効果も期待できる。

- ◆ 不登校は親子の関係性にも大きな影響を与えるため、多様化学校の保護者へのアプローチについて、委員（保護者代表）から意見が出された。黒沢氏からそれに対する助言があった。

【助言内容】

①「放課後カフェ」（保護者対象）

保護者の心理的ハードルを下げるため、フードバンク等と協力した「放課後カフェ」を実施した。心を閉ざした子どもや不安を抱える保護者とも対話が生まれ、交流できたとの報告があった。

②「親子でカフェしませんか」

ファシリテーターを介した親子対話の場を作ることで、親子関係の改善に劇的な効果があった事例が紹介された。

- ◆ どのような生徒がこの学校を必要とするのかについて委員間で議論され、黒沢氏から助言を受けた。

【助言内容】

①対象生徒のイメージ

勉強に自信をなくした子、中学校入学を機に環境をリセットしたい子、今の学校の枠組みに馴染めない子などが想定される。不登校生徒の約 10%～15%が多様化学校への入学を希望する傾向にある。

②柔軟な転入制度

高尾山学園では生徒一人一人の回復のタイミングに合わせるため、年間 10 回の転入機会を設けている。守谷市においても、入学・転入の条件を固めすぎず、本人の「学びたい」という意欲をアセスメントする場（転入学検討委員会）を設けることが必要ではないか。

（４）その他

- ・ 次回スケジュールについて